

静岡昆虫同好会70周年記念展 「郷土の昆虫を調べて」

鈴木英文

今から70年前の1953年（昭和28年）、高校生を中心とした若きバイタリティーにあふれる17名により結成された静岡昆虫同好会は、本年で70周年を迎えました。

当時、静岡県の昆虫相はまだまだ未解明なことが多く、全国的に見ても後進県だったと言わざるを得ませんでした。このような静岡県の昆虫相を解明しようと、富士山や南アルプスをはじめとする全県各地域の調査を精力的に行い、これまでに南アルプス千枚岳で新種センマイナガゴミムシ(*Pterostichus (Nialoe) hiraii* Morita, 2015)を発見したことをはじめとし、静岡県では未記録な種を発見するなど多くの知見を集積しました。

調査においては希少な種の調査のみならず、いわゆる普通種の分布と個体数の変動にも目を向け、70年間の自然環境の変遷を、昆虫を通して明らかにしてきました。

植林によるスギ・ヒノキ林の増加、草原の森林化などにより、かつてはそれほど珍しくはなかったチャマダラセセリやギフチョウは、県内では絶滅や絶滅危惧種になってしまいました。その反面、ウスバシロチョウやスギタニルリシジミなどは分布を広げています。

また近年の気候温暖化でツマグロヒョウモン、ナガサキアゲハなどの南方系の種が急激に分布拡大しております。

そのような年を追っての分布の変化も追跡調査して来ましたが、その証拠となる標本を残していく努力を今後も継続していきたいと考えております。

県内の地道な調査を進めていくうちに、日本の昆虫のルーツはユーラシア大陸との関係が深いことから、その生息環境と昆虫相を調査しようと1979年に始めた海外昆虫調査は、組織的な調査隊として18回の調査を行うほか、個人的な調査を含めて世界のおよそ40か国・地域の調査を行いました。その結果チョウでは5種の新種の発見や、調査した国における初の記録を出すなど多くの成果を挙げております。

以上の様な成果の一部を今回展示しましたので、ご覧いただくと幸いです。



静岡昆虫同好会調査・研究の展示



海外の昆虫標本を見学する来館者